

## ゴルフ、ボーリング、ラグビーなどスポーツ型お墓

第8回の特別賞には栃木県宇都宮市の國分 亮子さん（当時54歳）が入賞した。グリーン、パター、ウッド、キャディバッグ等ゴルフづくしのお墓だ。

中央にパッティンググリーン、両脇の花立はちゃんとディンプルもついたゴルフボール型（大理石製）、塔婆立てはキャディバック、パターもあって、外柵はウッド型と、ゴルフづくめのプロゴルファーのお墓が、「第8回全優石ニューデザイン特別賞」に選ばれた。あの世でも好きなゴルフに興じている姿が彷彿とし、残された家族にとっても訪れることが楽しくなるお墓の好例である。国分さんのコメントはくプロゴルファーで、



ゴルフ一筋の人生だった夫のお墓は、なんとかゴルフをイメージするものにしたいたいと思い、家族で考えてみましたが、花立てをゴルフボールの型にすることと、ゴルフクラブを浮き彫りにするということしか思いつきませんでした。そのような時に巡り会った石材店さんが、私共の思いを察して考えて下さったのがこのお墓です。石碑にはトロピカルグリーンという石を使いパッティンググリーンにして、塔婆立てはキャディバックを型どり、そこにパターを立てかけたように浮き彫りになっています。外柵はクラブのウッドのような型に仕上がりに、大変満足しております。夫はゴルフ教室にも力をいれておりましたので、お墓の前に立っておりますと、ゴルフのレッスンをしながら、コースを回っている夫が今にも現れて来そうな感じが致します。>

第11回の特別賞大阪府大阪狭山市の岡田 英晃さん（当時32歳）が、パーシモンのゴルフクラブにボール付、ゴルフ型お墓で入賞した。

11年前に他界した父の為に10年前に建てました。父は平成3年に直腸ガンが見つかり、手術をして人口肛門になりました。1年後に肺に転移が分かって治療もしましたが、手術ができないと言われました。好きなゴルフをできるだけ長くしたいという本人の希望からホスピスを探し、入院をするようになってからも、調子の良い時は呼吸器をはずせるので、食事ができなくても点滴をしてもらって出掛けて行っていました。そこまでゴルフが好きだった父のことを思い、パーシモンのクラブが好きだったことから自分でデザインし、石屋さんにも色も指定して造って頂きました。



第 11 回には大阪府堺市の堀谷 義臣さんが入賞している。「天国でストライク投げ  
ていますか？」母は若い頃、タイピストで  
した。スポーツオンチの母が、生まれて初  
めてボーリングをしたのは町内のボーリ  
ング大会があった時でした。75 歳になっ  
ていた母が、一番軽いボールを手にして投げ  
たけどガターでした。「指が合わないよ」  
と、汗を拭きながらボールを替えては投げ  
ていました。それから病院に入院する 82 歳  
2 ヶ月までの 7 年間はボーリングが楽しみ  
の日々でした。1 回行くと 3 ゲーム以上投  
げ、多い週は 4、5 回ボーリング場に行っ  
ていました。足腰が強くなり、全身運動にも  
なるし、スコア UP で一石二鳥と言っては  
大会に出場し、賞品を獲得。「これで一石三  
鳥よ」と楽しんでいました。その賞品を孫



たちに「お婆ちゃんが勝ったんよ」と見せプレゼントすると、孫達に誉められて  
いました。「お婆ちゃん、スゴイ！」。母はこの雰囲気を中心にいる事のひととき  
に、大いなる幸せを感じ、嬉しそうだった。上手になるにつれて投球フォームや  
レーン・コンディション等専門的になりアベレージも 3 桁 (110 点) になってい  
ました。その頃は難しい 2 番-10 番、6 番-7 番ピンのスプリットを倒す事のほ  
うが痛快らしく、倒した後に振り返った時の微笑む自慢顔が今でも臉に浮んで  
きます。

この様に母の趣味である好きなボーリングを「形」にできないかと石材店に行き  
ました。沢山の思い出 (スナップ写真、スコアシート、賞品、アクセサリ) を  
持って相談したところ、快く親身になって私達家族が持つイメージと、専門的見  
地からのアイデアを提案して頂きました。手前のレーンにはスパットを入れ、両  
側の花立てはピンの形に、真中のボールには親指の位置が線香立てになってお  
り、正面には父母が 1999 年 12 月 31 日 (大晦日) にゲームした時のスコアシ  
ートまでが刻まれています。

完成したお墓の前で手を合わすと、ボーリングレーンの前に立ったみたいに話  
しかけていました。「天国でもストライク投げていますか？」・・・と。

同じく第 11 回には宮城県仙台市泉区の司 義之さん (当 58 歳) が入賞してい  
る。二人の寿陵墓をつくりたい・・・と思い、二人の共通の思い出のダイビング  
を形にすることに決めました。私たちは「ダイビング」をこよなく愛しており、  
海の中でたくさんの思い出を作りました。海の中の熱帯魚達や、イルカ達はいつ  
も私達を新鮮にしてくれます。そしていつもその美しさに感動しています。二人



の一番大切にしているこの「思い」を、いつまでも語り続けたいと思っています。その思いを形にしたのが、このオリジナル墓石です。イルカや魚達とともに、海中遊泳する二人のダイビング姿をレリーフで刻みました。文字の「愛」「ありがとう」は海の魚達への感謝の気持ちを表したものです。



第 17 回には静岡県富士市の関 千文さんが入賞した。ダンス好きお父さんのために墓石前にステージを設けた。父を亡くし、お墓を建てることになりました。洋型のお墓にしようとして家族で決め、石屋さんに提案してもらいましたが、じっくりくるお墓にはなりませんでした。「お墓って、そんなに、こだわるものではない」と自分に言い聞かせ、契約することを決めた前日、別の石材店の施工事例集を見て「想いのお墓づくり」を知りました。これは、父が導いてくれたご縁と感じました。



ここから、私たちのワクワクしながらのお墓づくりが始まりました。見栄っ張りだった父だったから、周りとは違うお墓にしたい。お参りに来た方が「おっ、いいね！！」って感じてくれるお墓にしたい。

打ち合わせ中は、父の話題、家族同士の話しで笑いの絶えない楽しい時間・・・時には、大好きな父を思って、涙を流しながら・・・

「お墓を作っているのに、ワクワクする」こんな表現がぴったりなお墓づくりでした。中央の円の敷石は、社交ダンスをしていた父のステージ。ステージのバックには、家族みんなが好きな「桜」の象嵌彫刻。そして、墓誌には、父の好きだった胡蝶蘭がひっそりと咲いています。お参りに来てくれた方への感謝をベンチに彫刻。そして、一目惚れした可愛い「石んこ地蔵」が、微笑んで迎え入れて

くれます。納骨の日には、お骨と一緒に、父愛用のダンスシューズを納めました。きっと、天国の桜の花咲く舞台上、スポットライトをあびる父が踊っていると思います。ここなら、寂しくない。そんな、父へ想いがいっぱい詰まったお墓になりました。

第 17 回には茨城県神栖市の丹羽 篤之さん（当時 40 歳）のラグビーボール型の墓が入賞した。「ラグビーボール型の墓に入りたい。」と父から図面入りの封書が転勤先に届いたのは、何年も前のことでした。当時は、また突飛なことを言い出したものだと思っていました。墓など建てた経験もなく、ましてやオリジナルデザインの墓など私達に手が出るものとは思っていませんでした。おそらく父も半分は洒落だったのだと思います。

しかし、その父が亡くなり、実際に実家のある横浜にお墓を建てることとなりました。石材店の方に教わりながら墓地と墓石を選んでいるなか、頭の隅にあった父のラグビーボール型の墓について質問をしました。時間・敷地・予算ともに限りがある条件だったので、もちろん無理だろうと思い込んでの質問でしたが、答えは予想外のものでした。工夫しだいで可能だという嬉しい回答を頂き、すぐにデザインなどにとりかかりました。完成までの時間が限られていました



が、担当の方がとても親身に対応してくださり、都度アドバイスをくださったお陰で、どうにか納骨の日までに墓を完成させることができました。

父の影響で兄弟 3 人ともにラグビーをして育ち、家族の象徴ともいえるラグビーボール。それが墓石となり、父も喜んでいると思います。父は今頃、小さな孫達が親しみを込めて墓石をなでている姿をニコニコと微笑みながら見守っていることと思います。

同じく第 17 回には北海道河西郡の北海道河西郡の富居 清美さん（当時 55 歳）のバスケットと型墓石が入賞した。一周忌の頃から、主人は今何処に居るのだろう。「パパ、今日は何処の海で釣りをしていますか？行った事の無い海ですか？」と思うようになりました。バスケットボールの審判長として、プレーヤーの為に正しいジャッジをしてあげたいと言って、常に自身の体に気を使い、関わってきて 30 年の区切りで引退。これから人生を楽しもうと、2 人で海へ釣りに出かけ、朝陽の中でおにぎりをほおぼる。こんな小さな幸せに満足し



て生きていたのに、何故貴方が、ここに居ないのか問う事も、怒る事も行き場の無い日々でした。でも貴方の笑顔の写真は、心を少しずつ優しくしてくれています。ならば貴方を偲び、我が子やその子孫に、ここから始まる家系に貴方の人生が残る様なお墓が出来たらと思ったのです。2人の子供（兄・妹）も、バスケットボール、海釣り、愛犬、家紋と様々な思いを話し、そうして今貴方の「新しい家」が出来ました。お墓の表札の「Tomii Family」は貴方の文字です。パパ満足して下さいネ！貴方の残してくれた子供たちと共に貴方にプレゼントです。「For ever」は、こちらから贈ります。指輪に刻んでくれた言葉を記しました。

